わが市を語る 1

登米市（宮城県）

登米市長　熊谷盛廣（くまがいもりひろ）

「あふれる笑顔　豊かな自然　住みたいまち　とめ」を目指して

水の里　登米市

登米市は、東北の中心地宮城県の北部に位置し、仙台市から北へ約70㎞の場所にあります。市のほぼ中央を迫川、東側を雄大な北上川が貫流し、ラムサール条約指定登録湿地の伊豆沼・内沼・蕪栗沼をはじめとして、長沼、平筒沼、機織沼など多数の湖沼が点在する「水の里」です。

長沼ボート場と長沼フートピア公園

この豊かな水源は、市の中央部に広がる肥沃（ひよく）な大地を潤し、全国有数の米どころとなっています。また、東部に広がる森林は、津山杉、しいたけや山菜など多くの山の幸、国の天然記念物であるイヌワシなど野生生物の宝庫となっています。

東京五輪のボートとカヌー・スプリント競技での会場候補地になった長沼は、国内で唯一の常設2000m、8レーン公認で日本最高峰のボート場であり、ハスの景勝地でもあります。夏には湖面一面にハスが咲き乱れ、その景観は極楽浄土を思わせる素晴らしい景観です。

環境保全型農業の推進

本市では、豊かな自然と安全・安心な食を未来へ引き継ぐため、自然との共存を目指した「環境保全型農業」を推進しています。「赤とんぼが乱舞する産地を目指そう」を合言葉にスタートした「環境保全米」の栽培は、本市が発祥の地です。農薬や化学肥料をできるだけ減らした栽培方法を証明する「栽培履歴簿」の記帳をはじめ、食味調査、DNA鑑定、残留農薬分析などを実施した安全で安心なお米の産地です。環境にやさしい米づくりを広く知ってもらうため、首都圏などのイベントや仙台市内の小学校での出前講座など、PR活動に取り組んでいます。

米と並び、「肉用牛」は県内一の生産量を誇り、農協管内だけでも年間約3700頭出荷されています。平成27年の肉用牛市町村別産出額は約74億円で、全国8位、本州では1位になりました。飼育農家数約800戸、飼育頭数は約2万5000頭、県内トップとなっています。

本年開催された第11回全国和牛能力共進会には、本市から9頭の牛が出品され、第2区（若雌の1）の出品区において、この区の「日本一」に当たる優等賞1席を獲得しました。

環境保全型農業により生産された作物などを厳選し、出荷基準や品質管理にもこだわったものを「登米ブランド認証品」として認証しています。認証品目は、米、野菜、肉類、農産物加工品、木工芸品などです。環境保全型農業への取り組み（有機JAS、環境保全米、県認証、エコファーマーの認証）や品質・出荷管理（GAP〈基礎GAP、JGAP〉、トレーサビリティの確保、出荷基準の設定、遵守など）の認証基準を定め、この取り組みを行っている生産者から申請されたものを認証しています。

国際的な森林認証を取得

本市は、森林資源も豊かで、総面積5万3600haのうち、4割強の2万2220haが森林で占められています。農業だけではなく、林業も盛んで「杉」の産地としても有名です。

平成28年12月に市有林約2700haについて国際的機関FSC（森林管理協議会）による森林認証FM認証（森林の適切な管理に関する認証）を取得しました。さらに、本年6月には約1140haを拡大し、これまで「登米市」として個別認証として取得していた認証取得を団体や個人を含めた「登米市森林管理協議会」としてのグループ認証に切り替え、認証取得に向けた取り組みを進めています。

今後は、FM認証を取得した森林とCOC認証（加工流通過程の管理に関する認証）を取得した木材加工業者や流通業者との連携を図りながら、認証木材を活用した新たな木製品の製品化などを推進することにより、市内産木材・木製品の知名度向上、販路拡大につながるよう、地域林業・木材産業の活性化に取り組んでいます。

登米市PR動画「Go! Hatto登米無双」

魅力と価値を官民一体で発掘・発信

本市では、移住・定住の促進や交流人口の増加に向けて、市が持つ魅力（食・自然・文化・歴史など）を生かした効果的な「シティプロモーション」を行い、本市の知名度や認知度の向上およびイメージの確立に努めています。これらの取り組みについては、高校生から大人までが参加した「魅力発掘ワークショップ」を開催し、ここでのアイデアから、登米市キャッチコピー「うまし、たくまし、登米市」とロゴマークが生まれました。

また、市内の名所を舞台に多くの市民がエキストラとして参加するPR動画を制作し、官民一体となったPR活動に取り組んでいます。平成28年11月より配信を開始した動画「Go! Hatto登米無双」については、平成29年6月に開催されたアジア最大級の国際短編映画祭である「ショートショートフィルムフェスティバル&アジア」オープニングセレモニーにおいて、大賞である観光庁長官賞を受賞しました。

移住・定住の促進に当たっては、住まいや働く場の確保、子育てなどの各種支援制度を整備するとともに、相談者一人一人のニーズに合わせたきめ細やかなサポート体制を構築するため、新たに「登米市移住・定住サポートセンター」を開設し、本年7月より業務を開始しています。

今後も「あふれる笑顔　豊かな自然　住みたいまち　とめ」の実現に向けて、官民一体となった取り組みを続けていきます。

プロフィール

◆**面積**　536・12㎢
◆**人口**　8万1318人
◆**世帯数**　2万7311世帯

〔将来都市像〕あふれる笑顔　豊かな自然　住みたいまち　とめ

〔まちの特徴〕宮城県の北部に位置し、自然環境に恵まれた「水の里」であり、地域に特色ある歴史、伝統、文化が息づくまち

〔市町村合併〕平成17年4月1日、迫町、登米町、東和町、中田町、豊里町、米山町、石越町、南方町、津山町が合併

〔特産品〕環境保全米、登米産仙台牛、油麩、銘酒澤乃泉、木工芸品、はっと料理

〔観光〕みやぎの明治村、石ノ森章太郎ふるさと記念館、伊豆沼・内沼、長沼フートピア公園

〔イベント〕はすまつり、日本一はっとフェスティバル、東北風土マラソン、国重要無形民俗文化財に指定されている米川の水かぶり

登米市長
熊谷盛廣

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが市を語る 2

「世界遺産のあるまち　台東区」花の心でおもてなし

台東区（東京都）――台東区長　服部征夫（はっとりゆくお）

「世界遺産のあるまち台東区」として

平成28年7月、国立西洋美術館を構成資産に含む「ル・コルビュジエの建築作品―近代建築運動への顕著な貢献―」が世界文化遺産に登録されました。東京都では初めての世界文化遺産となります。

世界文化遺産登録1周年記念植樹

台東区では、平成21年に「世界遺産登録推進室」を設置し、区議会や地域の皆さまと一体となって、登録推進に向けて活動してきました。その活動などが功を奏し、悲願の登録決定となりました。

本年7月には、登録1周年として、上野恩賜公園の国立西洋美術館西門向かいにおいて、記念植樹を行いました。

また、本年度は、国立西洋美術館の価値や、登録までの経緯などを紹介する講座・パネル展を開催するとともに、普及啓発用のDVDを制作します。さらに、小学校3年生から6年生を対象とした教育教材を作成して、子どもたちへの普及啓発を進めていきます。

そのほか、世界文化遺産となった「ル・コルビュジエの建築作品」のある7カ国（フランス、日本、ドイツ、スイス、ベルギー、アルゼンチン、インド）の交流の輪をさらに広げていきたいと思っています。

そして、「世界遺産のあるまち台東区」の魅力や素晴らしさを、さらに国内外に向けて広く発信していきたいと考えています。

「花の心プロジェクト」の推進

本区は、江戸時代から朝顔市や植木市が開かれるなど、花が暮らしの中に根付き、人情豊かな風情と園芸文化を醸し出してきました。

花は、人の心を豊かにし、安らぎとゆとり、希望と勇気をもたらすなど、多くのことを私たちに教えてくれます。そのため、区では、平成28年4月、「花の心 たいとう宣言」を行い、この宣言をキックオフに、「花の心プロジェクト」を開始しました。

「花の心　たいとう宣言」式典（子どもたちによる宣言文唱和：平成28年4月）

プロジェクトでは、「花でまちを飾り、おもてなしのまち台東区を世界にアピールすること」を基本目標とし、「花の心を地域へ広げる」「まちを花で彩る」という2つの方向性で推進しています。

特に、花の心の醸成については、教育委員会と連携し、全区立小中学校や幼稚園、保育園、児童館など72施設で、「花育」という教育活動を行っています。

「花育」は、理科や生物の学習と

してだけではなく、子どもたちが花を大切に育てながら、命の大切さや力強さ、たくましさといった花の素晴らしさを受け止め、花の心を育むことにつなげる取り組みです。

ある幼稚園では、育てた花から種を取り、次の年度の学級に引き継げるよう子どもたちが一生懸命お世話を行い、小学校では育てた花を「押し花のしおり」にし、大切にしています。

このような取り組みに加え、自宅で気軽に花に触れ、その美しさを感じられる機会を増やすために、親子で参加できる花の講習会の開催や庭先などにプランターを設置した場合に助成を行う事業を開始しました。

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、プロジェクトを推進し、まちを花で彩るとともに、花の心を広げ、おもてなしのまち台東区を、本区を訪れる方々に伝えていきたいと考えています。

地方連携・都市交流事業の展開

本区では、姉妹友好都市8都市をはじめ、全国各自治体とともに発展・成長し、共存共栄を図るため、さまざまな都市交流事業を推進してきました。

平成28年には、姉妹友好都市を含む、全国から21の自治体が集まり、地元特産品の販路拡大に向けた商談会や、特産品のPR販売を行う「ふるさとPRフェスタ」を浅草で開催しました。商談会では、出店事業者に対する見積依頼があるなど、今後の販路拡大につながるものとなり、PR販売では、完売する自治体も出るなど、盛大にとり行うことができました。

また、本年6月には、松坂屋上野店で「台東区姉妹友好都市　日本酒・うまいもの&ものづくりフェア」を開催しました。日ごろ購入が難しい姉妹友好都市の日本酒をはじめ、各地の特産品を目当てに多くの方にご来場いただきました。

さらに、7月には、姉妹友好都市をはじめとする全国の自治体が、区内において特産品販売、観光案内などを行う場として、新たに「ふるさと交流ショップ台東」を千束通商店街に開設しました。最初の出店自治体は、姉妹都市の宮城県大崎市で、オープン初日、大崎市の伊藤市長自ら店頭に立ち、お米やお酒などの特産品の販売、観光情報のPRを行いました。

その後、山形県村山市、福島県南会津町など続いて入れ替わり出店しております。このふるさと交流ショップを活用することで、さまざまな自治体と交流し、その魅力を発信するとともに、商店街をはじめ、地域経済の活性化につなげていきたいと考えています。

「ふるさと交流ショップ台東」オープン初日の店頭の様子

プロフィール

◆面積　10・11㎢
◆人口　19万5650人
◆世帯数　11万5651世帯

〔まちの特徴〕上野の山の芸術や、浅草の大衆芸能、四季折々の伝統行事など、江戸時代以来の歴史と伝統のもとに、下町の庶民文化と新しい文化が、互いに刺激し合いながら、個性豊かな文化を育んできたまち

〔主な産業〕鞄・靴などの皮革製品、指物・銀器などの伝統工芸、ジュエリーなど

〔観光〕浅草寺雷門、上野恩賜公園、谷中銀座　など

〔主な祭り・行事〕浅草流鏑馬、三社祭、入谷朝顔まつり（朝顔市）、隅田川花火大会、浅草サンバカーニバル　など

台東区長
服部征夫

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが市を語る 3

歴史・ひと・自然が心地よい『緑の健都』を目指して

亀山市（三重県）

亀山市長　櫻井義之（さくらいよしゆき）

輝く「クオリティ・オブ・ライフ」の実現

わがまち亀山は、鈴鹿山系や鈴鹿川に代表される豊かな自然環境に恵まれ、歴史が織りなした佇まいを残す城下町・宿場町としての顔があります。市内に東海道五十三次の3つの宿場を有し、中でも東海道で唯一、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されている「関宿」は、今なお往時の面影をしのぶことができます。また、近年は新名神高速道路の開通による交通拠点性の高まりと併せ、特色ある環境・文化のプログラムとWHO提唱の健康都市戦略を推進しています。これら、まちを形づくる多彩な要素がうまく結びついた高い結晶性によって、輝く『クオリティ・オブ・ライフ（QOL）』を実現したいと考えています。市民の「愛着と誇り」そして「幸福実感」が高まり、そのことがまた一人一人の自発的な参画と協働への厚みとなって、持続可能な地域社会の好循環へとつながることを目指しています。

中部圏と近畿圏を結ぶ新名神高速道路亀山JCT周辺

新生・亀山モデル

本市は、三重県の北中部、名古屋から約50km・大阪から約100kmに位置し、わが国東西の結節点として、また伊勢志摩への分岐点として、古くから交通の要衝として栄えてきました。また、これらを強みとして昭和の高度成長期から多様な分野の製造業の立地が進んできました。

平成14年、三重県と連携した乾坤一擲（けんこんいってき）の産業政策により、シャープ（株）を核とする液晶関連産業の集積が始まりました。当時の日本は、構造的な円高デフレによる国内産業の空洞化という厳しい現実の中にあり、その衝撃的な企業立地により、また最先端の液晶TV「亀山モデル」が一躍名を馳せることとなり、全国の耳目を集めました。これらのインパクトは大きく、有形無形の成果へとつながりました。実のところ、液晶産業の集積以前も自動車産業をはじめ多様なものづくり企業が立地する「緑の工業都市」としての性格を有していましたが、その特性が数段強化される契機となりました。

一方、平成20年秋のリーマンショックの後、急激に潮目が変わるわけですが、一旦馬力ではない持続可能な地域経営への転換と行財政改革によって厳しい変化を乗り越え、現在次なるステージを展望しています。

亀山工場操業前と現在とを比較（平成15年／平成26年）すると、製造品出荷額の伸び3・04倍、市全体従業者数の伸び1・3倍、地方税額の伸び1・44倍、昼夜間人口比率の逆転に見る拠点性向上など中長期的な成長を果たしているといえます。また、財政力指数が1を超え、地方交付税の不交付団体となった6年間（平成17年度～平成22年度）に、都市のス

トックとしての「小中学校・幼稚園の改築」などのハード事業、県下を先導してきた「中学卒業までの医療費無料化」や「三重大学地域医療学講座の開設」「かめやま文化年プロジェクト」などのソフト事業を順調に展開することができました。さらには、全国に先駆け「ゴミ埋め立て処分量ゼロ・全量再資源化」の廃棄物処理システムと山元還元、埋設ゴミの再処理を実現しており、市民のＱＯＬ向上に少なからずつながってきたと考えています。

古今東西、都市のキャパシティを超える急激な経済成長が地域の自然環境や人的環境を破壊する力を持つときがあります。また往々にして、分度を越えた経済的エネルギーが人心を変え、社会を変質させてしまうこともあります。幸い本市は、この15年の激動と混沌（こんとん）の中で試行錯誤をしながらも、多くのことを学び、全国有数の変化にしたたかに適応することができたように感じます。これもまた、新たに生まれた「亀山モデル」であります。

国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された東海道関宿の町並み

『緑の健都』を目指して

さて、本市のまちづくりの特徴の１つに、「市民力による高い地域力」があります。市民一人一人が自分のまちに愛着と誇りを抱くことができれば、地域社会をより良くするための自発的な取り組みが始まります。市民活動や地域活動による多彩な社会参加を通じて絆（きずな）を深め、その地域愛や触れ合いがモチベーションとなり、生活の質と密接に関連するであろうことに疑う余地はありません。そのために情報公開・情報共有の制度整備をはじめ市民参画協働による「開かれた市政」を推進してきました。また、全国的に珍しい「市民活動応援制度・えがおカード」などの新しい自治の仕組みをつくってきました。その結果、昨今は市民活動やコミュニティ活動が活発化し、地域愛と比例してＱＯＬにつながっていると感じています。

本年春、『歴史・ひと・自然が心地よい 緑の健都かめやま』を将来都市像とする、新しい総合計画「グリーンプラン２０２５」が始動いたしました。誰もが心地よい「亀山クオリティ」は、今後も愚直に実践し磨き続けることで、地方創生の時代を健やかに切り開けると確信しています。

プロフィール

◆**面積**　１９１・04㎢
◆**人口**　４万９７４５人
◆**世帯数**　２万１０７６世帯

〔将来都市像〕歴史・ひと・自然が心地よい　緑の健都かめやま

〔まちの特徴〕三重県の北中部に位置し、鈴鹿山脈など豊かな自然環境に恵まれた内陸工業都市

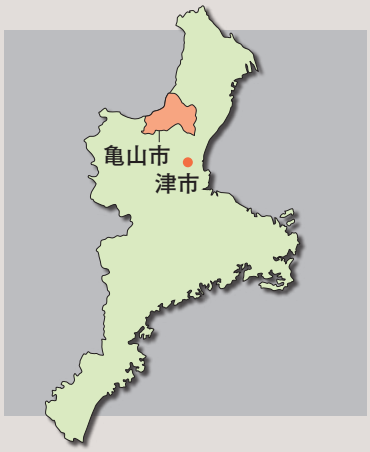
〔市町村合併〕平成17年1月11日、亀山市、関町が対等合併

〔特産品〕ローソク、亀山茶、自然薯、亀山紅茶、液晶テレビ、亀山みそ焼きうどん、亀山ラーメン

〔観光〕東海道関宿・亀山宿・坂下宿、石水渓、坂本棚田、日本武尊能褒野御墓、正法寺山荘跡、名阪森林パーク

〔イベント〕花しょうぶまつり、関宿祇園夏まつり、納涼大会、関宿納涼花火大会、亀山青空お茶まつり、亀山トリエンナーレ、東海道関宿街道まつり、亀山大市

亀山市長
櫻井義之



※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが市を語る 4

東かがわ市（香川県）

東かがわ市長　藤井秀城（ふじいひでき）

どこよりも元気なまちをめざして

働くところと住むところ

東かがわ市は、香川県の東端に位置し、高松市や徳島市の中心市街地まで車でおよそ1時間弱、神戸・大阪方面へは高速道路でおよそ1時間半から2時間と都市部へのアクセスが良好な立地となっています。また、北は瀬戸内海、南は阿讃山脈に接しており、海と山に囲まれ自然環境が豊かで、さらには気候も温暖で自然災害が比較的少なく、住む環境に非常に恵まれた地域となっています。

シーカヤックで巡る沿岸部のジオサイト群

平成15年4月に旧引田町・白鳥町・大内町の3町が合併して本市が誕生しました。これまで財政の健全性維持に留意しながら、機を見て、学校施設の統廃合や耐震化、市内全域への光ファイバーの敷設などの市民が快適かつ安全に、また安心して暮らせるまちづくりを進めてまいりました。都市部への人口流出傾向が全国的な課題となっている近年においては、平成25年に策定した東かがわ市基本構想による3つのまちづくりビジョン、「いつまでも住み続けたいまち」「安全・安心のまち」「市民との協働でつくるまち」を目指した施策展開を行っているところです。

若者がいつまでも住み続けることができるよう、働くところと住むところを中心とした各種支援施策の充実が重要と考えており、中学2年生を対象とした市内企業のPR説明会の開催やふるさと就職推進センターの設置、縁むすび事業、若者の住宅取得支援や家賃助成などに現在取り組んでおります。

新たな観光戦略

本市には広く一般に知られた有名な観光地はありませんが、国の天然記念物であるランプロファイアや絹島の柱状節理をはじめとした沿岸部のジオサイト群、日本で唯一の人形劇テーマパーク「とらまるパペットランド」、ホワイトタイガーの「しろとり動物園」、ハマチ養殖発祥の地「安戸池」などキラリと光る観光資源があります。本年は、引田地区の讃州井筒屋敷とその周辺の古い町並みエリアに程近い引田城跡が続日本100名城に選定されました。

「引田ひなまつり」で行われる子どもたちの雛行列

また、本市は、隣接する徳島県鳴門市と兵庫県南あわじ市でASAトライアングル交流圏連携推進協議会を組織し、観光、文化などの分野における広域連携に取り組んでおります。近年のサイクリングブームに乗じて、県域を越えた3市をつなぐサイクリングロードの設定を進めております。本市では、民間の有志によるサイクリングイ

ベント「ツール・ド・103」（103は「トウサン」と読みます）も今年で4回目の開催となり、この民間の取り組みと行政の取り組みとの連携、さらにはサイクリングツーリズムと既存の観光資源をつなげた新たな観光戦略の可能性にも手応えを感じているところです。

地場産業の振興

本市は、全国シェアの90％以上を占める手袋の一大産地です。これまで培ってきた手袋製造に伴う高い縫製技術は、高品質の革のバッグ製造へも派生していますが、地場産業の手袋製造には個人経営の零細事業者も多く、後継者不足によりその技術の伝承と事業継続が年々厳しくなってきているといった課題も抱えています。そのような中、市内の手袋職人がつくるフェンシンググローブが秀逸で、ヨーロッパをはじめ国内外の多くのトッププレイヤーに評価され、愛用されています。一方、本市ではフェンシング競技関係者とのさまざまな縁があって、市内で毎年全国大会が開催され、また、全日本クラス選手の強化合宿も行われています。このような機会をとらえ、その手袋職人と選手との交流を図ることにより、本市の手袋製造技術を全国に向けて発信する取り組みを行っています。さらには、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に当たり、海外のトッププレイヤーやその関係者とも交流を図ることで全世界に広く発信し、地場産業の活性化へとつながるような取り組みも進めております。

高い縫製技術で知られる東かがわ市の手袋製造

持続可能なまちづくり

最後に、本市の五名地区では早くから地域住民が自分たちの地域を自ら良くしようとその地域の特産品販売など地域の活性化に向けた活動を行ってきました。こうした活動が総務省の事例集に掲載されるなど、全国的に知られるものとなり、市内のほかの地域活動への波及効果も認められています。この地域の取り組みの特徴は、無理をせず自分たちのできるところから少しずつ地域活動を発展させてきたことにあります。私は、ここに持続可能なまちづくりの原点があると思っています。本市の創生に向け、自分たちのできるところから、また、ここぞというときには機を逃さず、効果がはっきりと現れるまでに時間は掛かるかもしれませんが、一歩一歩着実に、どこよりも元気なまちを目指していきたいと思います。

プロフィール

◆面積　152・83㎢
◆人口　3万1593人
◆世帯数　1万4005世帯

〔将来都市像〕どこよりも元気なまちをめざして

〔まちの特徴〕香川県の東端に位置し、地場産業である手袋生産は、伝統産業であり、ハマチの養殖の発祥地など、伝統と文化を今なお受け継ぐ、自然豊かなまち

〔市町村合併〕平成15年4月1日、引田町、白鳥町、大内町が対等合併

〔特産品〕手袋および関連商品、和三盆、海産物（ひけた鯛、ハマチ、タイ、ノリ等）、ぶどう餅、キャビア、イチゴ、パセリ、レタス、ねぎ

〔観光〕讃州井筒屋敷と引田の古い町並み、しろとり動物園、とらまるパペットランド、安戸池、香川のてぶくろ資料館

〔イベント〕引田ひなまつり、とらマルシェ、風の港まつり、山王宮あばれだんじり、とらまる人形劇カーニバル、あいらぶ東かがわ大物産展、ほろ宵まつり、五名いのしし祭り、空ちゃん田んぼ

東かがわ市長
藤井秀城

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。